

フェミニズム・ノート

一家父長制概念について

フェミニズムは、厳密に言うともルクス主義フェミニズム（マル・フェミ）では、女性差別の内容について、資本主義と家父長制という2本柱で論じている。そのウェイトの置き方はさまざまであるが、この「家父長制」という概念が十分理解できない。論考の中で、問題点を鮮明にしていく、という主旨でとりあげてみたい。

家父長制の中身としては3つある。一つは女性に対する男性の支配。もう一つが子供に対する大人の支配。更にもう一つは、現代的家族の概念からは外れる、拡大された奴隷をも含む家族における、労働の収奪という問題である。

問題を論じ易い方から扱って行きたい。

最後の労働の収奪という概念は、現代的家族については、奴隷労働そのものがないために、この概念は消えている。ただし、資本主義の生産の場において「家族」主義的な概念が持ち出される。とりわけ、アジア的なこととして、家族のような人間関係ということがだされ、管理支配のアメの要素としてだされている現実には、この家父長制の第3モーメントの資本主義的取り込みである。更に、女性が（商品生産）労働と家事の分業の現実の中で、更に労働に重きが置かれ家事が低く見られる中で、家事を主要に担うのが女性ということで、労働の場面でも女性はアシスタント的に位置付けられるということがある。

第2の大人の子供に対する支配というのは、ヒトの子供が養育なしに育たないということを中心として、そのことが子供に対する大人の支配としてつながってしまうということから来ている。そのことが拡大される形で、おとな—こどもという概念が拡大して、いわゆる長老支配というような形で現れる。ここで問題になるのは、子供に養育が必要であるということは生物学的事実として、問題はなぜそれが大人の子供に対する支配につながってしまうか？ということである。それは支配の構造があるから支配が生まれる—再生産されるという同義反復的なようなこととしてあるのではないだろうか？この長老支配についてはもう一度掘り下げて論及していく必要があると思う。

さて、第1の男の女に対する支配の問題である。このことについては、フロイトの精神分析学からエデプス・コンプレックスとして語られている内容がある。エデプス・コンプレックス自体が、男の女に対する支配の中で生み出され、再生産されているということが出来るが、ここで、問題になるのは、ファロス願望と幼児性欲の問題からエデプス・コンプレックスが生まれるとされることである。幼児性欲については精神分析学の中でもあいまいになっている。リビドーという概念があいまいになっていて、時には幼児性欲につながり、時には性的な欲望そのものと区別された「性的な欲望」という言い方になったりしている。更に、これは既に大人になった人の臨床的なところから出て来ている概念なので、後づけされたということがありえるのではないだろうか？どちらにしても、その臨床的なところを読み落としている私の現在のレベルでは留保しておくしかない。しかし、リビドーとはそもそも、養育なしに育たない幼児の不安や欲望というところから来ている

ことではないかという疑問を抱き続けている。

女性差別ということからとりわけ問題になるのは、ファロス願望ということである。ファロス願望が生物学的事実とすれば、エデプス・コンプレックスや男の女に対する支配にも生物学的根拠のあることとなる。ここで疑問に思うのは、ファロス願望が出てくるとしたら、なぜ乳房願望というのがないのだろうか、ファロス願望というのは幼児性欲からつながっている概念なのであろうか？

ノートという性格から、敢えて憶断的に述べておけば、これらの精神分析学的事実がその指摘どおりとしても、それはこの社会の構造内の物象化された相での関係性としてあるのではないだろうか？既に父の権威があるところで、その権威を巡ってのおそれや願望として、相互媒介的に機能しているのではないだろうか？そのことを、生物学的事実として錯認するところから、セクシズム（性差別主義）が生まれるような気がする。

さて、そこまで憶測的に展開しつつ、では家父長制という概念がどのような意味をもち得るのであろうか？恐らく、現在の資本主義論で差別の問題がちゃんととりあつかわれてこなかった、というところから「資本主義論」では差別の問題が語られないというところで、家父長制という概念が持ち出されたのだと思う。資本主義以前にも女性差別があったとい論考には、資本主義以前にも商品生産があったということに類比しうると思う。家父長制という概念を援用しつつ、女性差別の問題を明らかにしていくという努力は理解できるが、その家父長制という概念自体が煮詰められていないような気がする。

資本主義社会の分析は労働という領域—商品生産領域を主に分析してきた。再生産領域の分析が手付かずのままだった。社会の矛盾を「階級の問題」—「私有財産制」の問題から展開するのみで、マルクスがこの社会の矛盾を根源的に「分業と私有財産制」の問題としてとらえたのだけれども、その「分業」の問題についての分析が進んでいなかった。すべてが階級の問題に収束されていた。そのことから、個々の差別の問題についての取り組みがサボタージュされてきた。

ラディカル・フェミニズムはこの女性差別自身の問題をラディカル（根源的）にとらえんとした。その中で、家父長制という概念が生まれて来ている。今日、そのことをマルクス主義の唯物史観のテーゼを援用しつつ、生産—再生産関係に留意する、とりわけ家事を再生産領域としてとらえ返すということで、マルクス主義フェミニズムが生まれて来ている。（注）

今日そのマルクス主義フェミニズム自体も百花繚乱という状況であり、煮詰める作業はこれからである。そして、フェミニズムの実際の運動でも既に問題としてあがってきているが、「資本主義論」が差別の問題を対象化しえないということで、その論としての不備が露呈したように、フェミニズムも他の差別の問題を対象化し組み込みきれないなら、その論理的運動的破綻を示さざるをえないと思う。そして、そのようなトータルな視点に立つことによって、根源的にフェミニズムの問題をとらえうると思う。この根源性がまた同時にこの社会の分析を進ませ得るだろう！

(注) 唯物史観のテーゼそのものが問題になっている。しかし、例えば生産関係を土台として政治・文化・イデオロギーを上部構造とおくというテーゼをドグマ的にとらえたところで、経済的なことは土台、意識的なことは上部構造という解釈が出て来ているのであるが、そもそもマル・エン自身が生産という概念を 物質的生产 類的なヒトVの生産 欲求の生産と規定していることを忘れている（そもそもマル・エン自体を読んでいないのではということも考えられる）。今日、「マルクス葬送」が叫ばれているが、そもそも「マルクス主義」という概念自体にズレを生じているところで、論争がかみ合わなくなっているのではないか？「マルクス主義フェミニズム」という概念については尚更である。私見を述べれば、資本論の中で持ち出され中心的概念になっている物象化という概念は今でも生き続ける重要なタームであるし、生産関係に留意するということは（既に提起されていることも含め）生産概念をとらえ返す中で生き続けると思う。生き続けるというより、この物象化という概念や史観を援用することによって、個別の問題が煮詰められ明らかにされるだろうし、逆にその作業を通して、物象化という概念の詰りや、唯物史観そのものが、新たに煮詰められて行くに違いない。